栄村におけるブッポウソウの生息状況と震災の影響

中村浩志[1]
[1]信州大学

1. ブッポウソウについて

ブッポウソウは、日本には５月の初めに南から渡来し、本州、四国、九州で繁殖する夏鳥で、冬には東南アジアに渡って越冬する鳥である。かつては各地に分布し神社仏閣の境内などで繁殖していたが、近年数が著しく減少し、現在では環境省のレッドデータブックの絶滅危惧種Ｉ類に指定されており、長野県の天然記念物にも指定されている（中村 2004)。この鳥は、夜に「仏法僧」と鳴く鳥と信じられ、1,000 年以上にわたりこの名で呼ばれてきたが、今から 70 年ほど前「仏法僧」と夜に鳴くのはこの鳥ではなく、フクロウの仲間のコノハズクであることがわかったというエピソードを持つ鳥である。

長野県内には、50 年ほど前までは各地で繁殖していたが、その後数が減少し、現在では県北部の栄村と県南部の天龍村などに計 20 つがいほどが繁殖するのみである(中村 2004)。

2. 栄村でのブッポウソウの生態調査

栄村にブッポウソウが繁殖していることが明らかになったのは、1983 年のことである。その 2 年後の 1985 年から信州大学教育学部の生態研究室により栄村のブッポウソウの生態調査が開始された。その結果、栄村全体には当時計 10 つがいほどが繁殖していること、繁殖がみられるのは集落や農耕地に隣接したブナ林内で、ブナの樹洞に営巣していること（写真 1)、餌は、カナブン、クワガタ、セミ、トンボ類などの大型飛翔性昆虫であることなどが明らかにされた（中村・田畑 1990)。また、この鳥は、巣にアサリ、シジミなどの貝殻、缶ジュースの栓などを運び、消化を助ける礫き臼として使うという奇妙な習性を持っていることが明らかにされた（中村・田畑 1988)。

写真１　ブナの樹洞で繁殖する栄村のブッポウソウ

栄村で繁殖するブッポウソウの数は、1985 年以後現在に至るまで 27 年間にわたって毎年調査が実施されてきており、毎年の繁殖つがい数が明らかにされてきている。

3. 栄村でのブッポウソウの巣箱かけ

ブッポウソウが繁殖しているブナ林に1988年に巣箱を設置したところ､ブッポウソウが利用し、巣箱がこの鳥の保護に役立つことが解った（写真 2)。そのため、1990 年からは地元栄中学校の生徒さんに巣箱を制作いただき、村内のブナ林に巣箱 20 個ほどを設置した。また、村を挙げての保護活動の気運が始まり、1991 年にブッポウソウが栄村の鳥に指定された。以来、今年の 2011 年まで２１年間にわたり毎年 5 月の連休に栄中学校の生徒さんと父兄、信州大学生態研究室の学生・教官によって巣箱の制作（写真３・4）と巣箱かけ（写真５・6）が続けられてきている。

写真２　巣箱で繁殖するブッポウソウ

写真３　1990 年から開始されたブッポウソウの巣箱かけ

写真４　ブナの木へ巣箱かけ

写真５　2007 年から行われている電柱への巣箱かけ

写真６　横倉の皆さんと巣箱づくり（2007 年）

4. 2011 年栄村で実施したブッポウソウの調査

2011 年には、例年行っている巣箱の点検と設置および巣箱の掃除を５月１日に実施した（写真７）。この作業は、巣箱の中に残されているブッポウソウの羽や卵殻の有無、不消化物の昆虫の破片（ペリット）の有無と量から前年に巣箱で繁殖したかどうか、また無事雛を巣立たせたかどうかを調査し、あわせて巣箱の修理と交換、巣箱の掃除を実施するものである。今年この作業に参加したのは、栄中学校理科クラブの生徒さん５名と顧問の先生１名、信州大学生態研究室の学生と院生の３名と教員１名である。

なお、この日点検した巣箱の一つでムササビが子育てをしており、巣から出したムササビの子供を参加した中学生が手にとって観察することも実施した（写真８・９）。

ブッポウソウのヒナがふ化する時期にあたる７月８日・９日に２回目の調査を実施した。調査した内容は、栄村でブッポウソウが例年繁殖しているブナ林をまわりブッポウソウが棲息しているかどうかの確認調査と、設置した巣箱の中を点検し、ブッポウソウによる巣箱での繁殖の有無と繁殖している場合には卵数や雛数といった繁殖状況を確認する調査である。調査を実施したのは、信州大学生態研究室の学生と院生の３名と教員１名の計４名である。

写真７　2011 年５月１日に実施された巣箱かけと点検の様子

写真８　巣箱の中で繁殖していたムササビの子供の観察

写真９　巣箱から取り出したムササビの子供

5. 2010 年の繁殖つがい数と繁殖状況

2011 年 5 月 1 日にブナ林内に設置した巣箱計 23 個、林外の開けた場所にある電柱に設置した巣箱計 5 個について、巣箱の中を点検する調査を実施した結果、ブナ林内に設置した計 10 の巣箱が前年に繁殖に使われ、うち 7 つの巣箱で雛が巣立っていることが確認された。この他に、前年の 7 月に行った調査から白鳥集落裏山の自然のブナ樹洞で 1 つがいが繁殖し、雛が無事巣立ったことを確認している。そのため、昨年の 2010 年に栄村で繁殖したブッポウソウの数は計 11 つがいで、うち 8 つの巣で雛が無事巣立っていることがこの日の調査で解った。

6. 2011 年の繁殖つがい数と繁殖状況

2011 年 7 月 8 日・9 日に 2 日間かけてブナ林内に設置した巣箱計２１個、林外の開けた場所にある電柱に設置した巣箱計 3 個について、巣箱の中を覗き繁殖の有無と繁殖状況を点検する調査を実施した。その結果、7 個の巣箱での繁殖と 2 個の自然の樹洞での繁殖が確認され、計 9 つがいが繁殖したことが確認された。また、この 9 つがいの巣のうち 3 個の巣箱で 7 月のこの時期までに繁殖に失敗していることが確認された（表１）。巣箱を利用したが途中で繁殖に失敗した 3 巣は、平滝の No.5 の巣、横倉の No.6 と No.7 の巣で、それぞれ抱卵の途中で失敗し卵殻が残されていたもの、同じく抱卵中に失敗し卵 4 個が巣に残されたまま冷たくなっていたもの、産卵をしたかどうか不明のものであった（表１）。自然の樹洞で繁殖した 2 巣のうち１つは、前年と同様に白鳥集落の裏山のブナ樹洞で繁殖したもの（No.1）、もうひとつは平滝の No.2 の巣で、前年に使われた巣箱がオシドリの繁殖に使われ、抱卵中であったことから、その近くにあった自然の樹洞を使ったものと考えられた。自然の樹洞で繁殖した No.1 の巣では育雛初期、No.2 の巣ではまだ抱卵中であった。以上の結果から、2011 年には栄村で繁殖したブッポウソウの数は計 9 つがいで、うち 7 つの巣でこの時期に卵や雛を無事に育っていることが確認された。

表１　2011 年度　栄村ブッポウソウの繁殖状況

繁殖巣 No.	場所	繁殖状況 繁殖ステージ	卵・雛数	巣の区分	備　考
1	白鳥	育雛初期	雛3羽　孵化4・5日目	自然の樹洞	昨年と同じ樹洞での繁殖
2	平滝	抱卵中	卵数不明	自然の樹洞	昨年繁殖した巣箱でオシドリが繁殖
3	平滝	育雛初期	雛5羽　孵化1～3日目	巣箱	
4	平滝	育雛初期	雛3羽　孵化4・5日目	巣箱	巣の近くで親が観察される
5	平滝	繁殖失敗	抱卵中に失敗	巣箱	巣の近くで親が観察される
6	横倉	繁殖失敗	4卵のまま放棄されている	巣箱	
7	横倉	抱卵中	4卵	巣箱	
8	横倉	繁殖失敗	産卵したかどうか不明	巣箱	巣の近くで親が観察される
9	森	育雛中期	雛4羽　孵化7・8日目　1卵未孵化	巣箱	

7. 震災によるブッポウソウの繁殖への影響

先に述べたように栄村で繁殖するブッポウソウの数は、1985 年以来今日に至るまで 27 年間にわたり調査されてきている。それによると、1980 年代後半から 1990 年代初めには 10 つがいほどが毎年繁殖していたが、その後繁殖数はしだいに減少し、2000 年代初めには 5 つがいほどまでになったが、その後は回復傾向にある（中村 2004）。さらにその後、最近では、ほぼ１０つがいまでに回復し、調査を開始した 1980 年代後半とほぼ同様の繁殖数となっている。

長年にわたり巣箱を設置し栄村のブッポウソウの保護活動を実施してきたが、繁殖数は上記のようにこの間に増加していない。しかし、このことは、栄村での巣箱かけがこの鳥の保護に役立っていなかったことを意味するものではない。この 30 年間に長野県の他の繁殖地では繁殖がみられなくなり、隣の新潟県(渡辺 1998)や山梨県ではほとんどの繁殖地が失われ、関東周辺や東北ではこの鳥の繁殖が全くみられなくなっていることを考えると、栄村での巣箱かけは、栄村でのこの鳥の繁殖数の減少をくい止めるのに役立ったと判断される（中村 2004）。

栄村での繁殖つがい数は、震災前の昨年は 11 つがいであったが、震災後の今年は 2 つがい減少し 9 つがいであった。しかし、ここ数年は 10 つがいほどで安定しており、震災がこの鳥の繁殖数に影響したとは考えにくい。岡山県、広島県などの中国山地で繁殖するブッポウソウは、開けた場所にある電柱にかけられた巣箱で繁殖している（飯田 1992）ので、2007 年から栄村でも電柱への巣箱かけを実施している(写真 5)が、現在まで 5 年間栄村では電柱の巣箱での繁殖は見られていない。今年 3 月 12 日起きた地震により、巣箱をかけた電柱のいくつかが傾いたが、それによって電柱の巣箱での繁殖がみられなくなったというわけではなく、もともと繁殖には使われていなかったものである。震災後の 5 月に栄村に渡って来たブッポウソウは、従来通りブナ林にかけられた巣箱と自然の樹洞で繁殖していたので、今回の震災がブッポウソウの繁殖に影響を与えたことは、直接的にもまた間接的にもなかったものと判断される。

なお、今回の調査を通して栄村のブッポウソウは、この鳥の写真を撮影しようと県内外から集まってくるアマチュアカメラマンによる影響が大いに懸念されることが、改めて確認された(写真 10・11)。この鳥を観察し写真撮影ができる場所は現在ではほとんどなくなってしまったことによるが、今後は巣箱かけによるこの鳥の保護活動と共に、アマチュアカメラマンに対する対応策が必要とされる。

写真 10　栄村のブッポウソウを撮影に集まったアマチュアカメラマン

写真 11　巣箱で繁殖するブッポウソウを撮影するアマチュアカメラマン

文献

飯田知彦（1992）電柱を営巣場所とするブッポウソウの繁殖分布. Strix 11:99 -108.

中村浩志・田畑孝宏（1988）なぜ、ブッポウソウは巣に奇妙な物を運ぶのか. 日本鳥学会誌 36 : 137-152.

中村浩志・田畑孝宏（1990）ブッポウソウの雛の食物. 日本鳥学会誌 38 : 131-139.

中村浩志（2004）甦れ、ブッポウソウ. 山と渓谷社. 東京

渡辺　央（1998）新潟県におけるブッポウソウの生息状況. 新潟県鳥獣保護対策調査報告書. 新潟県